子どもたちの「やりたい！」を子どもたちで実現する

東京都練馬区　ねりま笑店街実行委員会・ねりまキッズボランティア

「みんな集合～！　今日の予定を確認します。今日は何をやるのかな？」

「えんにちと新聞の企画をやりま～す！」

5月5日こどもの日。東京都練馬区で長年親しまれた「としまえん」跡地に2023年に開園した、都立練馬城址公園の1周年記念イベント「練馬城址公園Happy 1st Anniversary」に「出前えんにち」を出展する、ねりまキッズボランティア（代表・江口暁さん）を取材した。

この日は、同会メンバーの幼児および小中学生と、活動をサポートする高校生、大学生や保護者など約30人が集まった。代表の江口さんから「新しく参加した子もいるのでみんな顔を覚えてね。各ブースでリハーサルしてOKだったら、担当リーダーからオープンを宣言してください」と呼びかける。

出前えんにちには「UFOキャッチャー」「ピタゴリラスイッチ」「わなげ」の3つのゲームと、「すずらん新聞8号企画アンケート」のブースを設けて、キッズがそれぞれのリーダーとなる。でも、どうやって動こうかな？　みんなちょっと迷っている様子。「ドタバタしてても、そこから何を感じてどう動くのかも含めてねりまキッズの活動なんです」と江口さんは笑顔で見守る。

3つのゲームは、子どもたちとボランティアの学生が力を合わせて作った作品だ。100円で楽しんでもらい、みんなが持ち寄った景品も用意する。小さな男の子がえんにちの前に並ぶと、UFOキャッチャー班リーダーの小学生“りこ”ちゃんが声をかける。「どれをやりたい？　どれでもいいよ！」。UFOキャッチャーのルールには「自分が取りたいのがあったら受付の人に言ってね！」と書かれている。うまく取れない子も「助けてあげたい」という“りこ”ちゃんの思いが込められたルールだ。

ねりまキッズボランティアは、練馬駅南口商店街での「練馬こども笑店街」のお祭りに子どもたちがお店を出店したことをきっかけに2015年に設立。年齢も学校も異なるつながりのなか、子どもたちの「やりたい！」気持ちを形にしようと、子ども主体でボランティア活動やイベントの開催、子ども新聞発行などの多彩な活動を行っている。

キッズのメンバーは3歳から中学生まで約30名。参加は自由だが長年続けている子も多い。毎月1回の定例活動では、子どもたち同士でやりたいことを話し合い、主体的に活動している。そのサポートを専任スタッフのほか、保護者、高校生、大学生などが行っている。

中でも、武蔵大学ボランティアサークルA'tからは学生が毎回参加しており、子どもから慕われロールモデルとしても貴重な存在だ。活動に毎回参加するA'tの古谷さんは「子どもと関わる経験ができる場はとても貴重。活動のお手伝いができているのが嬉しい。子どもたちの頑張りから自分が教えてもらうことも多い。また、ねりまキッズの活動に携わるうちに、練馬区を詳しく知ることもできた」と、子どもの成長と一緒に自分の成長も実感しているそうだ。

団体の発足当初から続ける活動が、ねりまこども新聞社として毎年1回発行する「すずらん新聞」。子どもたちが記者となり、1年かけて企画、取材、記事作成、配達に至るまでの全てを子ども主体で行う。編集会議を何度も開いて記事の内容を検討し、記事以外にも漫画や挿絵で参加する子もいる。タブロイド判8ページになる大作だ。

現在は第8号の編集中ということで、今回の出前えんにちでは「すずらん新聞8号企画アンケート」を行った。文章を書くのが大好きという中学生メンバーの"ふー"さんは「ねりま

キッズだと取材内容を自分たちで決めて、交渉もして、一から全部できるので楽しい」と話す。今回の「練馬の人のくらしアンケート」は、練馬区民の起床時間と仕事を聞いて、その関係性を新聞に載せたら面白そう!と考えたそうだ。「おなやみアンケート」を企画した小学生メンバーの"まりりん"さんは、アンケートに書かれた本気の悩みにどんな回答をしようか思案顔。

昨年発行した第7号の取材では、豊島園駅前に開園したばかりの映画「ハリー・ポッター」の体験施設や、練馬区役所の展望レストランの取材など、大変だったけど楽しかったという。"ふー"さんにとってねりまキッズは「新しいことに挑戦できる場所」だという。自分の意見が言えるようになり、意見を言うと協力してもらえる関係がある。自分で考える力が身についたと感じているそうだ。

ねりまキッズボランティアは、年齢で役割を分けていない。小学3年生でもリーダーになる。障がいのある子もリーダーをやるし、取材交渉もやる。子どもはそれぞれの得意分野で活躍できる。一人一人が良いものを持っている。こうして外で頑張っている子どもの姿を親に伝えると、親も自分の子どもに新たな発見ができる。子どもへの関わり方を改めて考える機会になる。

江口さんはこうした活動の経験から「今後は草の根からこどもたちがより自分らしくいられる環境づくりをしていきたい」と、同じ思いを持った地域の団体と力を合わせ、「こどもまんなかネットねりま(50団体から構成)」も発足。「多様な子どもたちが安心でき、共に輝ける居場所を作っていけたら」と願う。

【連絡先】ねりま笑店街実行委員・ねりまキッズボランティア
メール：nerikids-bora@googlegroups.com